

トを感じている女性ほど、離婚によっても、人間的に成長し、子どもも自立するなどのプラスの側面を得られると考えていた。また、今の世の中では結婚しなくても生きていけるといった個人志向型結婚観を持っているほど、男性では、離婚する親に性格的な問題がある、無責任であると考えることがなく、女性では、親の離婚によって、子どもに問題行動が生じるとは考えていなかった。

第Ⅱ部 離婚と結婚に対する意識調査(成人調査) 要約

【離婚に対する意識】

1. 離婚によって人間的に成長するなど、離婚がもつプラスの側面も認識されており、一般論として離婚に対して許容的な態度が持たれていた。しかし、離婚にはさまざまな苦勞が伴うと考えられ、自分自身が離婚することに対しては忌避感もたれていた。また、半数の回答者は、離婚する人は、性格に問題がある、責任感がない、結婚を安易に決めている、と離婚する親に対するステレオタイプを持っていた。離婚によって子どもが非行化するとは考えられていないが、子どもには両親が必要であり、離婚によって子どもにかかるストレスが懸念されていた。
2. 男性は女性に比べると、離婚に対する忌避感や抵抗感が強く、離婚する親は性格的な問題がある、無責任であると考えていた。また、離婚家庭の子どもは、非行化しやすいと捉えていた。女性は男性に比べると、離婚は人生の再出発である、離婚によって人間的に成長するなど、離婚に対して許容的な態度を持っていた。また、離婚家庭の子どもは親思いである、自立していると捉えていた。

【結婚に対する意識】

1. 結婚しないという生き方も選択肢のひとつであるにとらえられ、結婚が一人前の男性や女性としてのみなされるための条件であるという考えは否定されていた。しかし、半数は、結婚をすることを自明のことにとらえ、子どもを持つことが当然のことという保守的な結婚観を持っていた。また、結婚によって、安らぎや人間的成長、社会的信用が得られると考えられていた。同時に、金銭や時間、自分の個性なども犠牲にされるとも考えられており、結婚生活には我慢が必要であると考えられていた。
2. 男性は女性に比べて、結婚に対して保守的な結婚観を持ち、結婚したのであれば、子どもを持ち、配偶者と最後まで添い遂げるべきであると考えていた。また、結婚によるメリットを認識すると同時に、結婚によって、自分の個性や生き方、金銭などを犠牲するのは当然であると捉えていた。

【離婚・結婚に対する意識の下位側面】

1. 『離婚家庭の否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『離婚に対する好意的評価』、『離婚家庭に対する同情』、『離婚による人間的成長』の6側面から構成されていた。男性は女性に比べて、離婚や離婚する親、その子どもに対して否定的な評価を持っており、女性は男性に比べて、離婚を好意的に捉え、離婚によって人間的に成長すると考えていた。
2. 『伝統的結婚観』、『結婚のメリット』、『結婚による拘束感』、『個人志向型結婚観』の4側面から構成されていた。男性は女性に比べて、結婚によるメリットを感じ、結婚を当然と考えていると同時に、拘束感も感じていた。また、60代は結婚を当然とする

考え方を持っており、30代には、結婚による拘束感が強かった。

3. 社会的信用や安らぎなど、結婚で得られるメリットを認識しており、また、これらのメリットが得られる結婚を当然と考えている個人ほど、結婚生活を放棄する離婚に対して否定的な評価を持ち、離婚をする親に性格的問題があり、責任感がないと感じていた。また、離婚家庭で育つ子どもは問題行動を起こしやすいと考えていた。一方、結婚を人生の選択肢のひとつとして捉え、結婚後も自分の目標を持つことが必要であるといった個人志向型の結婚観を持っている個人は、離婚を否定的に捉えることはなく、離婚を人生の再出発であるといったように、好意的に捉えていた。